

長床の学童



南側上空から園舎全体を望む。園舎と敷地外の環境を調整するように、中立的なポジションに学童を計画した。

あわいをつなぐ長屋

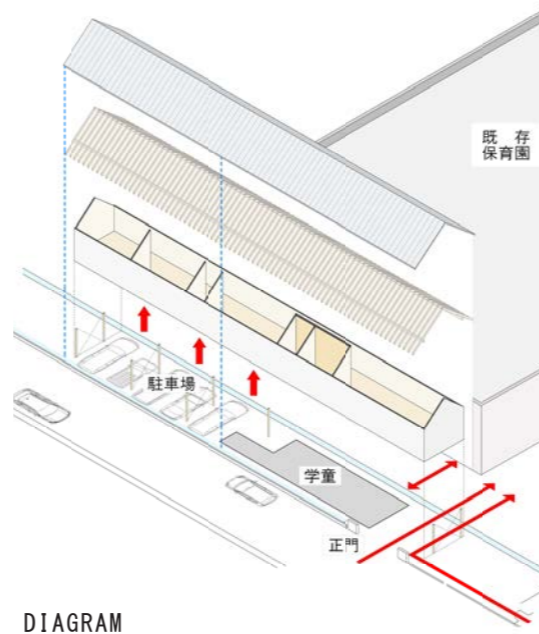
「卒園した子どもたちが帰ってこられる居場所を作りたい」という施主の思いから本プロジェクトは始動した。敷地は静岡県磐田市の今之浦川沿いに位置し、既存保育園の正門および駐車場として利用されていた細長い敷地に、定員19名の小規模型の学童を増築した。保育園の正門からの動線、従業員の駐車台数の確保、今之浦川の氾濫対策など複数の外的条件にตอบสนองするように学童のボリュームを持ち上げた。

建物の配置、間口のスケール設定は、以下の条件に基づいて決定している。

- ・ 既存保育園への法的影響が及ばない適切な離棟間隔を確保
- ・ 既存側溝ラインと軒先ラインを合わせ雨水排水の調整
- ・ 既存正門からのアプローチを尊重したエントランスの形成
- ・ 駐車場の車両スケールに合わせた軒先長さの設定

これらの条件と子どものスケール感を踏まえ、2間の間口と19間の奥行の細長いプロポーションのプランとした。間口の狭い構成は屋根裏や秘密基地のような空間を生み出し、児童の遊び心や学びの創造性を育むことを期待した。屋根にはスギの扁平垂木を用いた8寸勾配の合掌構造を採用することで、幅の狭い活動空間に対しておおらかな空間を獲得すると同時に、園庭で遊ぶ子どもたちに向かって視線や意識が向くようにした。

この建築は、かつてこの地域にあった長屋門のように子どもたちにとっての「象徴の場」「交流の場」「見守りの場」となり、子どもたちを優しく迎え入れていくことを目指した。



園庭から学童、エントランスを望む。2階東側の開口は大きくすることで園児と児童の活動が双方に感じられるようにした。



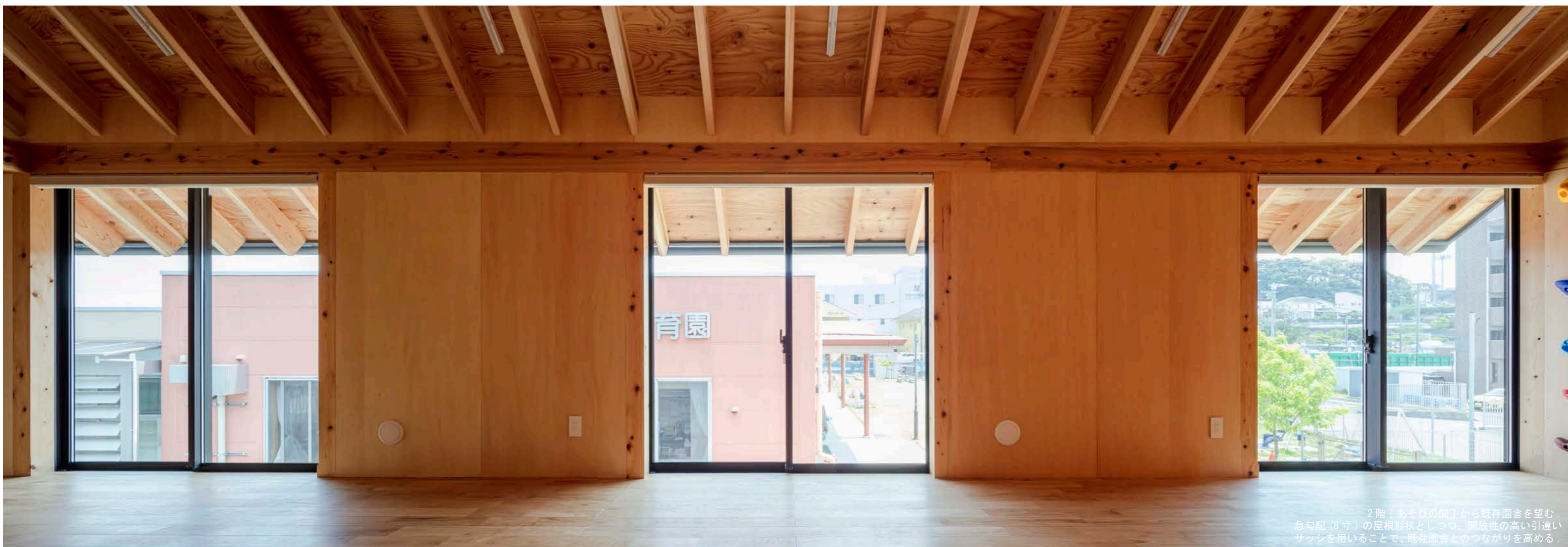
1階ピロティから南側を望む。既存駐車場の機能を活かすようにボリュームを持ち上げ、屋根の軒先先端と既存側溝は同一ラインとしている。



階段吹抜け部から「そうさくの間」を望む。
スギの扁平梁にライン照明が当たることで天井にリズムが生まれる。



「あそびの間」から南側正面を見る。
棟の高さを利用してホルダリングを壁にあしらった。
東側開口部は安定した採光と既存園舎とのつながりを高めた。
西側は西日を抑えつつ軒裏への反射光と換気窓として機能する。



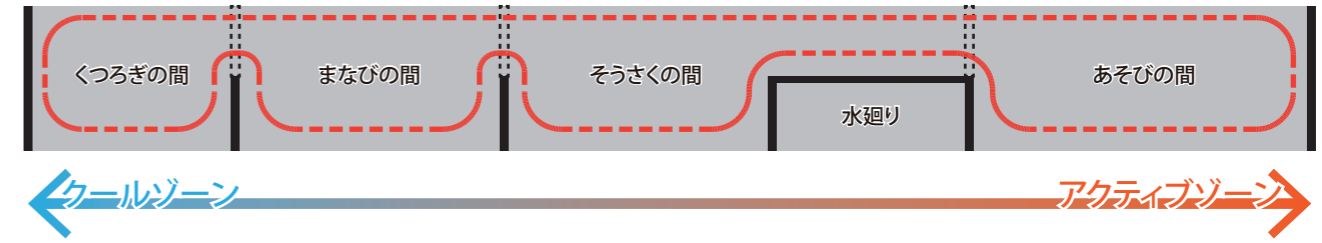
2階「あそびの間」から既存園舎を望む。
急勾配（8寸）の屋根形状としつつ、開放性の高い引違い
サッシを用いることで、既存園舎とのつながりを高める。

子どもたちの自由な活動を受け止めるリニアとヒダ

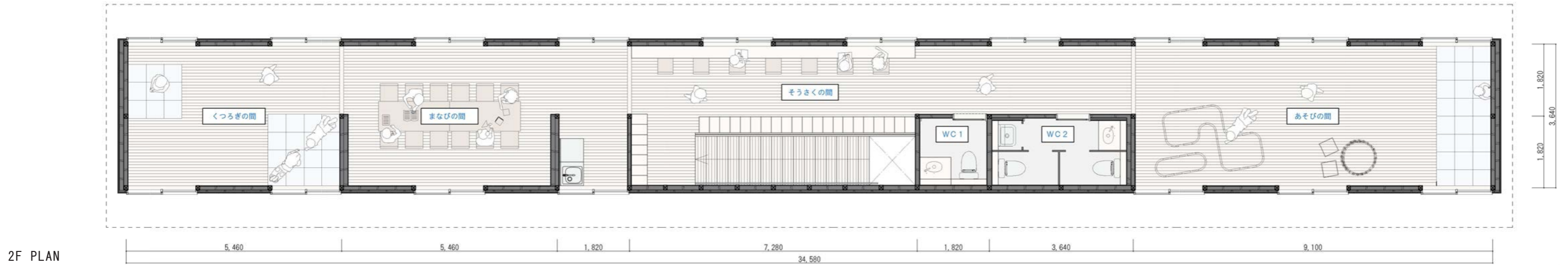
学童は低学年から高学年まで幅広い年齢の子どもたちが利用する場であり、宿題に取り組む子どももいれば、おやつを食べたり自由に遊ぶなど活動内容は多岐にわたる。この建築は放課後の授業を終えた子どもたちにとっての「第2の家」としての役割を担っている。

細長い平面形状を活かし、南北軸に沿って空間がグラデーションに変化するよう計画した。ポルダリングやおもちゃを広げて遊ぶことができる「あそびの間」、折り紙や工作活動が行える「そうさくの間」、宿題や書き物に集中できる「まなびの間」、寝転んだりお昼寝ができる「くつろぎの間」へと、アクティブゾーンからクールゾーンへと緩やかに空間が変化する構成とした。各エリアの間には、水廻りや構造耐力壁を兼ねた袖壁を設けることで、リニアな平面プランにヒダが生まれ、視線や音を緩やかに仕切る。

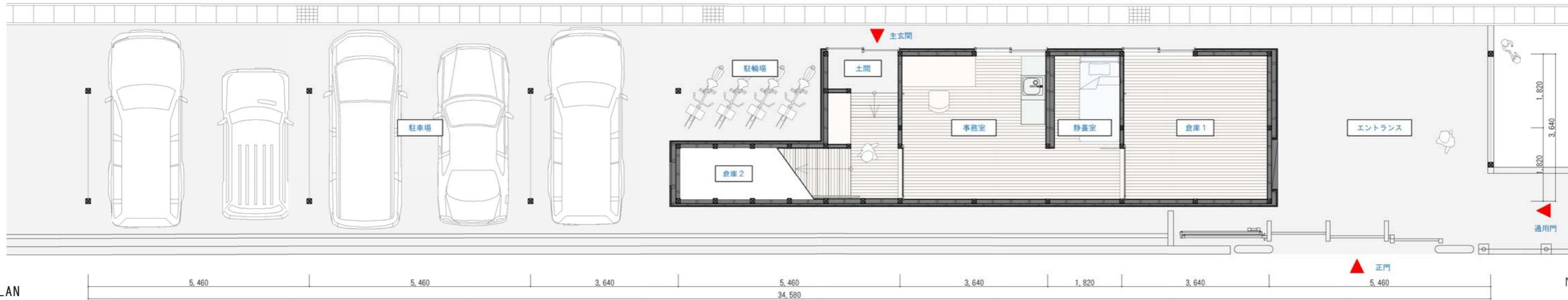
間口が2間という幅の狭いプランだからこそ活動に密度が生まれ、19間という長いプランだからこそ活動に奥行きが生まれるように子どもたちはその日の気分や過ごし方に応じて、自然に居場所や活動が選ばれる自由で伸びやかな空間を目指した。



PLAN DIAGRAM



2F PLAN



1F PLAN

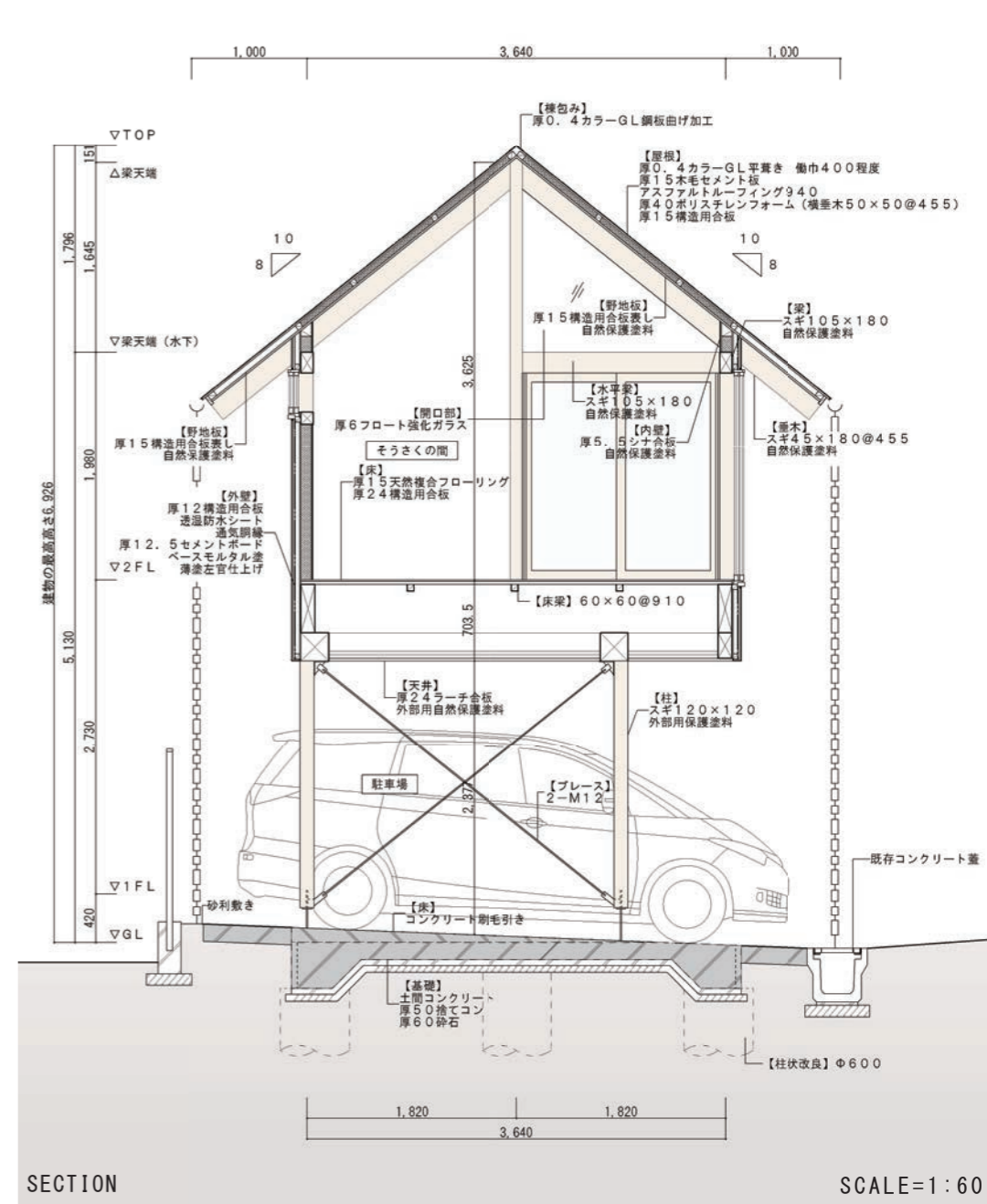


SECTION

SCALE=1:100



南側エントランスから学童・園舎を望む。
手前の軒下空間は園舎の新たな顔として
園児・児童を迎え入れる。



学童東側立面を望む。
開口部のリズムを整え児童の活動が園舎から覗けるように計画した。
1Fは既存の駐車場を活かすように建物を持ち上げ、耐力壁をプレースの二重
タスキ掛けとすることで軽やかな構造を実現した。

所在地	静岡県磐田市見付	竣工年月	2020年5月
構造	木造	設計期間	2017年4月～2019年7月
階数	2階建て	施工期間	2019年10月～2020年5月
敷地面積	4,513.22㎡	建築主	社会福祉法人シオン会
建築面積	145.12㎡	撮影	高橋菜生写真事務所
延床面積	256.90㎡		

子どもたちを包み込むミニマルな構造
短手2間、長手19間の細長い平面プランに対して水下の梁天レベル1.8mに抑えつつ屋根を8寸勾配とすることで、子どもたちをおおらかに包み込む伸びやかな長床空間を実現した。屋根はスギ材45×180@455の垂木で構成し、棟部の接合はホームコネクター工法を採用することで、児童施設ならではのミニマルなスケール感に仕立てた。

